

新潟応用地質研究会誌第34号の 発刊にあたって

茅 原 一 也*

新潟応用地質研究会は非常にユニークな研究会であります。会員は官庁・大学・民間の各方面にわたっていますが、それぞれの分野での活動は近年益々活発で、その活動の一端は総会後の研究発表に現われています。また、見学会も常に参加多数であり盛況であります。地方でこれだけ活動が盛んな研究会はめずらしいというべきで、しかも研究会にしろ見学会にしろ、東京方面など新潟県外からの参加者の多いことも特筆すべきことと思われまます。

本研究会の会誌は1986年第28号（再発足1号）以来6号を数え、今回34号が発刊されることになりました。本号は本年6月16日開催の例会において発表された次の研究、すなわち、

川島隆義氏（新協地質）：老朽堰堤の補修例

田中富雄・加藤雅胤（大手開発）：温泉調査におけるCSAMT法

以上の論説のほか、次の例会で発表が予定されている2つの論文、

矢沢茂伸氏（キタック）：泥岩を材料とした盛土の設計手法、

針生真也氏（応用地質）：ダム建設に伴う骨材の問題

がのせられています。

応用地質上の問題は、年々新しく同じからずといってよいでしょう。しかし、これを扱うのは人間です。“年々歳々花相似たり、年々歳々人同じからず”という言葉思い出します。しかしながら、土质地質に関しては年々歳々相似たり、ということにはならないようです。コンクリートの劣化問題一つをとってみても、酸性雨による劣化など、これから問題になるのではないのでしょうか。

それにしても私共会員には絶えざる研鑽が必要ですが、このためには本研究会の会誌の意義を深く考えるこの頃であります。

* 新潟大学名誉教授、株式会社キタック